



日下貝塚

1971

東大阪市教育局委員会

は し が き

日下(くさか)貝塚は、東大阪市日下町に所在している。この遺跡がはじめて発見されたのは大正14年のことであり、大阪府下においては唯一の貝塚として関心を集め、学界に知られるとともに、各方面による発掘調査が数回にわたって行なわれて来た。

この日下貝塚が所在する東大阪市日下町¹⁾は、これまで水田と畑のつづく田園地帯であったが、この土地が生駒山ろくの高燥地であり、好適の生活条件をととのえていることから、急ピッチで住宅地化が進んで来た。なだらかな台地の上に存在している日下貝塚の周辺もその例外ではなく、台地の縁辺部から住宅が立ち並び、この学界著名の遺跡もやがて湮滅に瀕する危険がせまってくる。

市域に100カ所をこえる埋蔵文化財包蔵地をもっている本市では、その保存をはかるため、昭和44年度より、5カ年計画を立て、包蔵地の周知徹底と事前協議体制の確立をはかるとともに、各遺跡のもっている重要性和緊急度に応じて、遺跡範囲を確認するための調査を逐年実施し、その保存対策を講じるなどの施策を実施して来た。本日下貝塚については、本市に所在する数ある包蔵地の中でも最重要の遺跡であり、先に記したような現状から早くその保存を考える必要を痛感していたが、ようやく昭和45年度になってその機が熟し、昭和45年度における文化財保護事業の一つとして、遺跡範囲を確認するための分布調査と、遺跡全域の地形測量を行なうことを計画した。幸い文化庁より埋蔵文化財包蔵地緊急調査補助金および大阪府補助金の交付を受けることができ、総額700,000円をもってこの調査を実施した。

この調査は、東大阪市教育委員会を主体として実施したが、これまで本遺跡の調査を継続的に進めて来られた帝塚山大学堅田 直教授に全面的にご協力をいただくこととし、調査の全体を同大学考古学研究室に委嘱した。本概報の刊行に当り、堅田教授ならびに学生諸君のご労苦と、調査を許された土地所有者各位のご協力に対して、記して感謝の意を表する。

- 1) 近世には河内郡日下村、明治22年市町村制の実施によって日根市村大字日下、大正元年以来孔舎衙(くさか)村、昭和30年以降枚岡市日下町と呼んで来た地域である。昭和45年2月住居表示の施行による町名改正によって日下町は1～8丁目に分けられ、日下貝塚の所在地は日下町2丁目と7丁目にまたがることになった。

位置と環境

日下貝塚は、生駒山のふもとに発達した扇状地の一かく、標高25m前後をはかる台地の縁辺に立地している。地形図に見られるように、この台地は東ではかなり急な傾斜をもっているが、その縁辺においては平坦面となって平野部に接している。日下の集落はこの台地上に発達した谷口集落で、南にはこの扇状地を横切る日下川が流れ、北側は地形に若干の高低があって谷間となり、近世にこの谷間を埋めて構築された日下大池がある。

この貝塚が発見された大正末年から昭和30年前後まで、付近一帯は水田と畑地のつづく田園地帯であった。昭和36年、日下川をこえた南がわ約150haの敷地に大規模な宅地造成の行なわれたことが契機となって、日下の集落も急速に市街地となり、貝塚の所在する台地の縁辺から西方にかけて、今日までの間にはほとんど宅地化している。

生駒山地の西ろくを占める東大阪市の東地区は、府下有数の遺跡密集地帯である。本遺跡のまわりにも多数の遺跡の分布していることが知られるようになったが、そのいずれもがここ数年間における工場や宅地の造成によって知られたものである(図版1参照)。

まず縄文時代の遺跡としては、本遺跡の東方1.5km、標高300m前後をはかる通称「乳母の懐(おんばのふところ)」と呼ばれている地点から、早期のものと考えられる有舌尖頭器が発見されている。また北方900mの善根寺(ぜんこんじ)町の春日神社の南がわに、後期の土器片と石鏃の出土を見ている善根寺遺跡がある。縄文時代の石斧は、北方600mの池端町の一地点からも採集されている。こうした点から、日下町の土地にはかなり古い時代から人びとの住みついていたことを物語っている。

弥生時代の遺跡としては、南方750mの中石切町に前期の土器片が出土している芝遺跡と、西方1kmに中期の土器を出土している和泉遺跡がある。また日下川をこえたすぐ南には、5世紀古墳時代の堅穴住居跡1基を検出した馬場遺跡、さらに南方600mには、弥生時代後期から古墳時代につづく大集落と考えられる芝カ丘遺跡が存在している。降って歴史時代の遺跡として、日下には奈良時代に行基によって建立された石凝院(いわこりいん)が存在していた。昭和36年に建築基壇の一部を検出したが、それが石凝院の遺跡と考えられる。

日下は『古事記』『日本書紀』に記された神武天皇の東征や、日下の直越をこえて若日下部王をたずねる雄略天皇の物語などに登場する。それは日下の土地が古くから人文が開けた土地柄であったことを示すものであろう。

- 1) これらの遺跡の概要については『枚岡市史』第3巻史料編(一)に紹介したので参照されたい。

これまでの調査

1. 日下貝塚の発見とその前後

日下貝塚の所在地として知られることになった現在の日下町2丁目の台地上には、「西貝畑」「東貝畑」の字名がつけられている。台地の上を南北に通じている農道をはさんだ東側が「東貝畑」であり、西側が「西貝畑」である。この字名がつけられたのは、その名の通り貝殻が出土するからであり、文禄3年(1594)の『草賀村検地帳』に“かいのはけ”と記されているから、すでにこのころに字名がつけられていたことがわかる。日下貝塚 — 貝の出土する畑 — の存在は400年も前から日下の人びとが知っていたのである。今日ではほとんど見られなくなってしまったが、ここ十数年前まで、遺跡の中心と考えられる畑地の表面に、地面が白く見えるほど貝殻(主としてセタジミ)の散らばっている状態を見ることができた。

こうして日下の地に貝殻のちらばっている畑のあることは知られていても、それが考古学上のいわゆる貝塚であるということは注意されたのは、大正14年のことであり、当時中河内郡枚岡村大字額田に在住されていた故八木 博氏の功績であった。そのころ付近一帯の土地は故河澄泰蔵氏(当時の孔舎衙村長)の所有であったが、氏は孔舎衙小学校長であった松本氏に話され、松本氏は知己である八木 博氏にそのことを話されたのが日下貝塚発見の端緒となった。²⁾氏はまず試掘を行ない、貝塚であることを確認された。³⁾

八木氏はこの調査の結果を京都帝国大学考古学教室にもたらされ、大正14年10月10日、同大学の島田貞彦、末永雅雄氏らによって発掘調査が行なわれ、9種の貝殻と土器が発見された。⁴⁾さらに10月17日には直良信夫氏も発掘を試みられ、縄文式土器とともに14種の貝殻が発見された。⁵⁾こうして、この遺跡は「日下貝塚」として学界に知られるようになり、この貝塚の最初の発見者である八木 博氏は、これが機縁となって趣味の考古学会を創立され、昭和2年には、現在も遺跡の一角にのこっている「日下貝塚の碑」が建てられた。⁶⁾

1) 文禄3年の『草賀村検地帳』は、現在天理図書館に完本1冊と、日下村の旧家河澄正直氏所蔵の日下村文書の中に1冊がある。ただし河澄家本は表紙を欠失している。

2) 河澄正直氏「日下貝塚発見後日物語」(『ひらおか』第2号、昭和32年)

3) 八木 博氏「日下貝塚発見について」(『考古学雑誌』第17巻第1号、昭和2年)

4) 島田貞彦氏「河内国中河内郡日下発見の貝塚について」(『人類学雑誌』第41巻第12号、大正15年)

5) 直良信夫氏「日下の貝塚」(『近畿古代文化叢考』所収、昭和18年)

6) 昭和2年11月3日に建てられ、八木 博氏の主宰された趣味の考古学会の会誌『好古趣味』第1冊にその記事がのせられている。碑は遺跡の西端に東面して建てられ、表面に「日下貝塚

之碑」，右側面に「口碑ニ云フ神武天皇東征ノ時皇軍ノ苦戦セシ孔舎衙坂ハ此処ナリト」の碑文が刻まれている。

2. 大阪府による調査

昭和15年は皇紀2600年に当り，これを記念する行事がその前後にわたって種々計画された。その一つとして，昭和13年に大阪府史蹟名勝天然記念物調査委員会で計画され，昭和14・15兩年に行われた府下における史前遺跡の調査がある。その趣旨は2600年を記念するという立て前であったが，調査の内容は考古学的な発掘調査で，府下の縄文・弥生時代の研究ばかりでなく，学界にも多くの資料を提供した。対象とされたのは，桑津遺跡（大阪市）・恩智遺跡（八尾市）・日下遺跡（東大阪市）・速里小野遺跡（大阪市）・男里遺跡（泉南市）の五遺跡である。

これらの調査は，大阪府史蹟調査委員であった梅原末治博士（当時京都帝国大学教授）・小林行雄博士（同助手）・藤岡謙二郎博士（同副手）によって行なわれ，その調査結果は『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第12輯の中に収録されている。¹⁾

この時発掘調査の行なわれたのは「東貝畑」のKKFで，多くの縄文式土器片・石器などと共に5体の人骨が出土し注目を集めた。この地点は現在宅地となっている。

1) 「中河内郡孔舎衙村日下遺跡」（『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第12輯，昭和17年）

3. 帝塚山大学による調査

この遺跡における包含層の状態は，過去に甚だしい攪乱を受けたようで，昭和14年の調査においても，縄文式土器，土師器，須恵器が混在して出土したようで，遺構は明確に検出されず，多くの疑問があった。昭和35年・39年・41年の3回にわたって行なわれた帝塚山大学による調査は，この疑問から出発し，この疑問を解決するために行なわれたものであり，主眼点が包含層の状態を確認すること，さらに時代の異なる遺物の混在がどういう理由によるものかという点についても，原堆積層の検出によって，遺跡のひろがり，埋葬人骨との関係を追求することにあったようである。

3回にわたる調査は，同大学堅田 直教授を中心として行われたもので，多くの新知見が加わった。¹⁾ 調査地点は次の通りである。

昭和35年 KKF — 26～36

昭和39年 KKF — 24, KKC — 97～KKF — 7

昭和41年 KKC — 98～KKF 8

1) 帝塚山大学考古学研究室編『東大阪市日下遺跡』（考古学シリーズ2，昭和42年）

遺 跡 の 範 囲

日下貝塚は、生駒山ろくに形成された扇状地の先端が河内平野にのぞむ台地上に立地している。東方に山丘を負い、前面に旧大阪湾をのぞむこの台地は、ここに貝塚をのこした原始人にとって絶好の生活環境であった。

本遺跡における既往の調査ならびに今回の調査における知見にもとづいて遺跡の範囲を考えると、少なくとも南北200m、東西200mにひろがっているものと推定される。台地の北縁は低い谷間となり、ここに近世に構築された日下村の惣池 — 日下大池がある。この大池の南西に、大正14年に島田貞彦氏が発掘調査を行なわれたA地点があり、その東方からも遺物の出土していることが伝えられている。また日下大池のすぐ南に当たる山口忠三氏所有地でも遺物の包含が見られ、日下大池の南岸では遺物包含層の露出がみとめられ、渇水時には、水際に石器・土器などの散布が見られる。この地点は従来日下貝塚として知られている地点からは北へ約200mを距てており、別の遺跡であるということも考えられないこともないが、両地点をむすぶ中間においても遺物の散布が見られる。こうした点からこの日下大池の際が遺跡の北限と考えるのが妥当であろう。

遺跡の東側は、日下谷が台地の縁辺に沿ってカーブをえがいているが、この縁辺に沿って地形は下降しており、道を距てた東側からは遺物の出土も聞かれず、遺物の散布もみとめられない。従って遺跡の東縁は当然この河谷にのぞむ傾斜面の上面と考えると誤ないであろう。

次に遺跡の南側は、ゆるやかな傾斜面となって日下川に面し、西側は、現在では宅地の造成によって著しく旧地形を変えてしまっているが、かつては崖面となっていたと考えられる。KKF 26～36の調査地点は、台地の縁辺が南方に下向する傾斜面に当たり、ここでは遺物包含層が検出されている。またやや東に寄ったKKC 97・98、KKF 7・8でも遺物包含層がみとめられこの台地の縁辺が遺跡の中心部に当たることは間違いがない。これより以南は日下川の河谷であり、この河谷はおそらく縄文時代においても谷間であったと考えられ、遺跡の南限はこのあたりと考えられる。

こうした地形の観察と今日までの知見を総合すると、本遺跡の範囲が台地上に限定されて来るが、これをさらに検討して見ると本遺跡を次のように分けることができるようである。

- 1) 中心区域 台地の上面
- 2) 周辺区域 台地の縁辺から傾斜面

この中心区域は、現在では約15,000㎡をのぞいて宅地となり、日下大池に至る北側はすでに古くから日下町の集落となっている。また周辺区域についても宅地化が急速に進み、空地をほとんどのこしていない現状である。

調査の概要

今回の調査は、日下貝塚の現状と遺跡の範囲、遺構の残存状態等を把握し、今後における保存対策を考える上での資料を得ることを目的としたもので、大要次のような作業を実施した。

1. 地形測量

遺跡が立地している台地全体について地形測量を行ない、1000分の1地形図を作成した。この地形図作成作業は、本市において作成されている3000分の1地図を使用し、現地において微細な部分についての修正を行ない、また測量によって等高線を入れたもので、本遺跡としては最初の精密な地形図である(図版2参照)。

この作業は延15日間を費やし、帝塚山大学堅田 直教授の指導のもとに、同大学考古学研究室 助手加藤由紀子、同研究員松田節子、森 信子の諸君に従事していただいた。

2. 地区設定

上記の地形図をもとにし、今回ならびに今後の調査に備えて、本遺跡の範囲内と目される南北200m、東西200mの区域について、次のような基準に従って地区設定を行なった。

日下貝塚周辺は、約100分の3の傾斜をもって西へ下向する斜面であるが、日下村の北に位置する日下大池を中心として東西に小谷が続き、南においては、扇状地によって西流する谷川(日下川)が南へ蛇行して流れを変え、さらに西へ向きを変えている。従って、これまでに確認されている遺物、遺構の確認地点と、谷と蛇行する谷川によって囲まれる約40,000m²の台地状の地形に画される広汎な地域を中心として、更に周辺に連続すると想定される外部の周辺地域を含めて、広域にわたる地区設定を行なった。

地区設定は、中心地域及び周辺地域を含めた面積が、東西、南北とも300m四方の区域に含まれることになるため、100mを一辺とする方形の大区画A～Iの9区画に分割設定した(図版2参照)

大地区設定の南北ラインは、磁北に合わせ、9つの大区画の内、Aは、東北隅に当たり、その西側にはD地区をあて、条理制の平行式割付の逆設定を行なっている。

遺跡の範囲の地区分割設定に従えば、遺跡の北半は、日下の現集落が大半を占めているのが現状で(A、B、D、E、G、H、Iの各地区)、わずかに、台地状地形の南端部(C、E、F地区の一部)が田地、畑地として残るのみであるが、宅地化は、ここにも及んでいる。

大区画の設定は、100m四方の9区(A～I地区)の設定を行なったが、更に大地区は、10m四方(100m²)の計100コマの中地区に分割し、現場における調査、その他の小地区設定に備え

た。中地区は、大地区設定に従い、東北隅より南へ1～10区、更に北へ上って⑪～⑳という具合に中地区設定を行なっている。

3. 分布調査

本遺跡の範囲については、既往の調査によって、北は日下大池の南岸からはじまり、南は日下川にのぞむ傾斜面に至るまでの約200mの間と、東は日下川が曲折する個所にのぞむ傾斜面、西は地形の状態から平野部に接する台地端までの約200mの間にあることが知られている。

今回の調査では、この範囲内の全域とくに現在水田または畑地としてのこされている区域について地表面の観察を行ない、田畑一筆ごとに遺物の散布状態を確認した。ただし現在宅地となっている部分についてはこの作業は不可能であるため、でき得る限り居住されている方がたへの聞き書によって、過去における遺物の出土についての情報の採集につとめた。その他、中心区域および周辺区域について、地区設定にもとづいてグリッドまたはトレンチを設定し、遺物包含層ないし遺構存在の有無とその状態を把握するための小規模な発掘調査を試みたが、土地所有者の承諾が容易に得られない地点もあって、予期する程の結果を得ることができなかったのは残念である。

遺跡の状態

1. 中心区域

本日下貝塚の中心区域と考えられるのは、台地のもっとも高いところ、すなわち標高25mの等高線を中心とする部分および日下川にのぞむ台地の縁辺で、地区設定に従うとKKC・KKFの北半に当る部分である。この区域については既往の調査もあり、今回も小部分について調査を試みた。

全体として見ると、地表面下約20cmに表土があり、その下に厚さ40cm～60cmの遺物包含層の存在がみとめられる。ただし包含層の厚さないし遺存状態は地点によってちがいがあり、また昭和39年における帝塚山大学の調査結果によると包含層の攪乱の見られる個所もみとめられている。従って過去における耕作その他の土工によって元来存在したはずの遺物包含層ないし遺構も若干の損失ないし攪乱があったことが知られるが、それは縁辺部に限られ、今日なお水田、畑としてのこされている1119・1120・1138・1139番地等については遺構が完全に埋存している可能性がある。

またこの区域において重要なことは貝層の存在していることである。この貝層は、帝塚山大学による既往の調査によって、KKF24からKKC97にかけて、すなわち西北から東南の方向で延長約80mにわたっており、地表面下約30cmに20～30cmの厚さで貝殻の堆積がみとめられている。この貝層は、その西端がKKF13・14あたりにあり、それより西方は地山が下降していることと関連して切れていることが判明した。この貝層の性格については現在のところ不明の点が多く、今後の検討をまたなければならないが、セタシジミを主とする14種の貝類が知られている。貝層は日下大池の南がわ、すなわちKKA、KKDでも検出されており、中心区域の貝層とは、約150mを距てている。この両者のつながりについては現在のところではまったく不明であるが、今後の検討をまたなければならない。

1139番地（井上正治氏所有、畑地）については、敷地の南端の部分に試掘グリッドを設定した。この地点は貝層の存在する場所であり、表土の下に貝層がみとめられ、地表面下約80cmに縄文時代の遺構を検出した。従ってこの地点を中心として縄文時代の遺構が埋まっているものと考えられる。この地点が攪乱を受けていない処女層であることは重要であり、水田・畑としてのこっていることは今後の保存対策とも合わせて明かるい見通しを投げかけるものであろう。

1137番地、すなわちKKF20と30にまたがって溜池（寺田伴嗣氏所有）がある。この池の池底でも遺物の出土することが知られている。ただしこれらの遺物が、遺物包含層ないし遺構面の露出によって出土したのか、里人が伝えているように付近出土のものをはめ込んだために出土するものかどうかは不明である。この溜池の北がわ、1135、1136番地でもその表面に土器片の散布がみとめられるから、中心区域はこのあたりまで延びているものと考えられる。ここから日

下大池の南岸までは約100mをはかり、遺跡の範囲と考えられる南北200mのほぼ中心になっている。

2. 周辺区域

標高25mの等高線でかこまれる中心区域のまわり、すなわちこの台地の周辺が周辺区域である。台地の縁辺に沿って地形は漸次下降し、ゆるやかな傾斜面となっている。この周辺区域についてはこれまで未調査であったが、今回の調査ではこの区域における遺構の確認をはかった。

まず1104番地（川上常次郎氏所有、畑地）すなわちKKC64に設定したグリッドでは、土層がずいぶん攪乱されていることがわかった。従って台地の縁辺に沿って南北につけられている道から東側は、現状では傾斜面となっているが、旧地形とはいちじるしく変わっているのではないかということが考えられる。さらに遺構の存在についても現状としてはわからなくなってしまっているようであり、こうした結果から遺跡の東限は道までであると考えるのが妥当であろう。

また1150番地（入江伊佐雄氏所有、空地）は、標高で見ると20m前後となり、台地との比高は5mあり、こうした個所における遺構の存在を確認するために試掘溝を設定したが、日数の関係で未完である。あるいは日下川に沿った低平部分では縄文時代乃至それ以降の時代の遺構が地表面よりかなり深いところに存在している可能性も考えられる。

3. 日下大池南岸部

日下町の中央を東西に通じている道路の北側から日下大池の南岸にかけては、古くから宅地となっているが、若干の空地がのこされている。この区域の中に、大正14年日下貝塚の発見当時、島田貞彦氏によって発掘調査が行なわれ、縄文時代後・晩期の土器・石器が貝殻とともに出土したB地点がある。また渇水時には日下大池の水際で縄文式土器、石器の散布が見られ、これまでに若干の石鏃、石斧等を採集している。このことは池の南岸に包含層の露出がみとめられるとともに、日下貝塚の北限を物語っていることは先にも記した通りである。

今回の調査では、大池南岸における土層の観察および大池南側の畑地についてボーリング調査を行なった。その結果では、明らかにこの区域に遺物包含層の存在がみとめられることを再確認することができたが、遺構の状態については現在のところ不明であり、将来を期したい。

以上既往の調査および今回の調査結果にもとづいて、遺跡の状態を略述した。くわしいことは、資料の整理と検討を加えた上改めて報告書を作成することにした。

保存と整備計画

日下貝塚は、大阪府下における唯一の貝塚であり、また和歌山市に所在する鳴神貝塚とともに、大阪湾をめぐる地域における数少ない貝塚として重要な遺跡である。とくに本貝塚からは埋葬人骨が発見されていること、出土する貝殻の大部分がセタシジミを主とする淡水産貝類であることなど、考古学上の貴重な問題を孕む遺跡である。さらに本遺跡の発見が古く、以後今日までたびたびの調査が行なわれた学界著名な遺跡であり、大阪府下における先史時代の遺跡としては、藤井寺国府遺跡とともに、日本考古学史上にも記念すべき遺跡といえることができるであろう。

遺跡付近一帯の状況は、こうした考古学的価値とは無関係に、ここ数年の間にいちじるしく変貌し、台地の縁辺部には次々と住宅が建ち、も早遺跡の覆滅が目前に迫るという最悪の事態になって来ている。本市では、こうした緊迫した現状から、日下貝塚の保存を積極的に考え、今回の調査もその保存をはかることを前提として着手したものであり、まず本年度には遺跡範囲を確認するための分布調査と、遺跡全体の分布調査を実施した。今回の調査および既往の調査結果を合わせて遺跡のひろがりは大略把握することができたが、各地点における遺構の状態やその残存程度については今後なお継続して調査を進めて行く必要がある。それにしても、まわりから急速に宅地に侵食されて来ている実情の中では調査を行なうことよりも土地自体の保存をはかることが必要である。現状では遺跡の範囲にふくまれる区域のうちまとまった部分としては約5,000㎡が田畑としてのこっているにすぎず、この区域とても西方および南方は新しい宅地に取り囲まれ、近い将来に宅地化する危険性がある。この区域は遺物包含層のない遺構の埋存していることは確実であり、部分的ではあるが貝層が存在し、貝塚としての中心部分であることは先に記した通りである。

本市としては、本遺跡のおかれている現状から、この区域に限ってでも、文化財保護法による史跡の指定を受け、用地買収によって永久保存をはかることを考え、すでに史跡指定申請書を提出している。以後は、この敷地全体について逐次全面発掘を行なって遺構の検出をはかり、その残存状態に応じて整備を行なうこと、さらに日下貝塚の出土遺物を中心に、本市で所蔵している本市域所在の縄文時代遺跡出土遺物の保存と展示をはかる資料館を建設することなど、小規模ではあっても「日下貝塚公園」として整備する計画を立てている。

日下貝塚は考古学上貴重であり、全国的に知られている点からも記念すべき遺跡である。遺跡のおかれている現状は決して楽観できる状態ではないが、今日わずかにのこされた部分に限られ、たとえそれが日下貝塚の片鱗にすぎないとしても、それを後世に伝えることは本市としての重大な責務であろう。

日下貝塚付近土地所有者一覽表

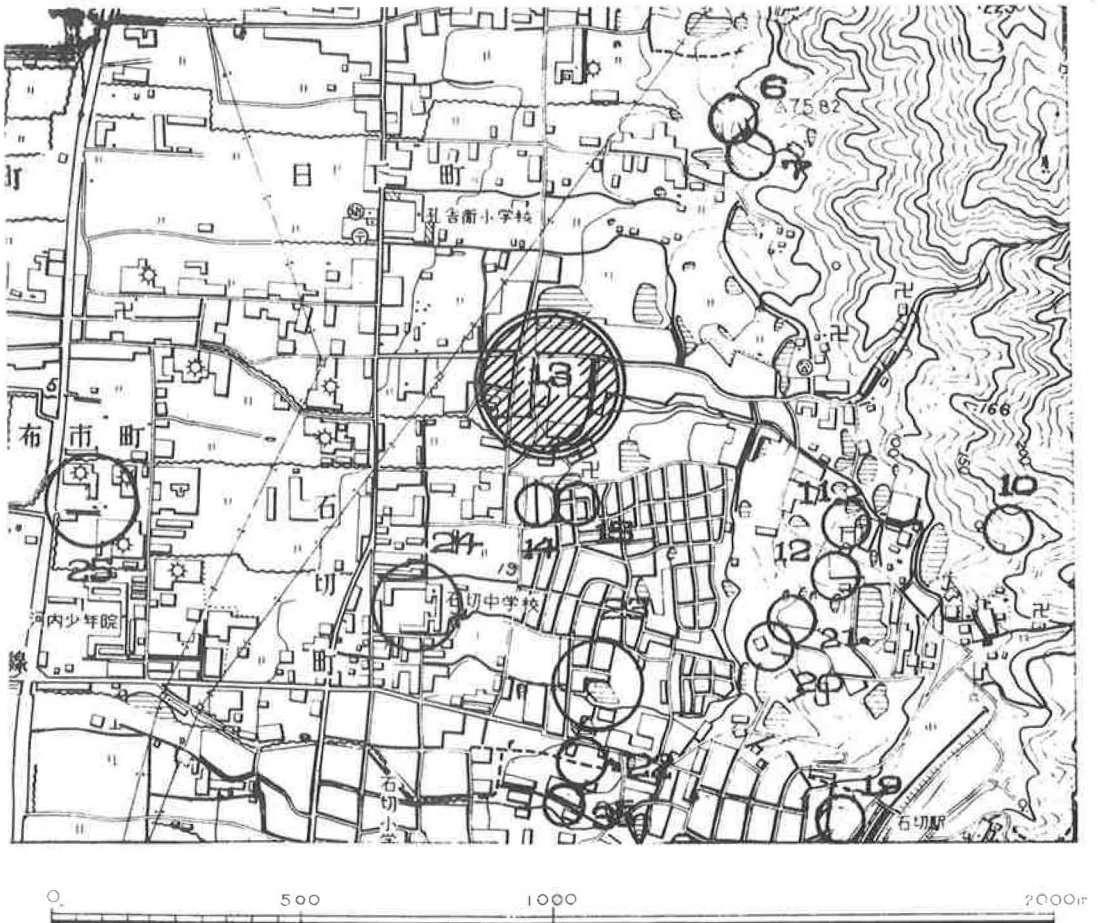
町・丁目	地 番	地 目	土 地 所 有 者 住 所	
日下町 7 丁目	日下町 7 6 4 - 3		東大阪市日下町	石 田 安太郎
"	" 7 6 5 - 3		大阪市西成区梅通 2 9	磯 野 章
"	" 7 6 6 - 3		"	"
"	" 7 6 7 - 1		東大阪市日下町	中 納 久 昭
"	" 7 6 8			
"	" 7 6 9 - 1		東大阪市日下町	西川能勢治郎
"	" 7 6 9 - 2		東大阪市日下町 2 7 2	池 田 千 花
"	" 7 6 9 - 3		"	西川能勢治郎
"	" 7 7 0 - 1		"	"
"	" 7 7 0 - 2		"	"
"	" 7 7 0 - 3	田	"	"
"	" 7 7 1 - 1	"	東大阪市日下町	井 上 岩三郎
"	" 7 7 1 - 2	"	"	"
"	" 7 7 2	溜 池	"	井 上 格
"	" 7 7 3	田	"	井 上 岩三郎
"	" 7 7 4	畑	"	"
"	" 7 7 5	"	"	井 上 利 家
"	" 7 7 6	溜 池	東大阪市日下町 7 8 1	三 浦 林四郎
"	" 7 7 7	畑	東大阪市日下町	天理教藤尾分教会
"	" 7 7 8	田	"	井 上 岩三郎
"	" 7 7 9 - 1	田	"	"
"	" 7 7 9 - 2	宅 地	"	"
"	" 7 7 9 - 3	"	東大阪市日下町 7 2 9	山 田 不二男
"	" 7 8 0	田	"	柴 田 春 男
"	" 7 8 1	"	東大阪市日下町 7 8 1	三 浦 林四郎
"	" 7 8 2	山 林	東大阪市日下町	河 澄 泰 蔵
"	" 7 8 3	溜 池	"	共 有 地
"	" 7 8 4	田	"	井 上 岩三郎
"	" 7 8 5	"	"	"
"	" 7 8 6	溜 池	"	"
"	" 7 8 7	田	"	"

町・丁目	地 番	地 目	土 地 所 有 者 住 所
日下町 7丁目	日下町 7 8 8	畑	東大阪市日下町 井 上 岩三郎
"	" 7 8 9	"	" 河 澄 泰 蔵
"	" 7 9 0	"	東大阪市日下町 7 9 7 西 江 音 松
"	" 7 9 1	宅 地	東大阪市日下町 井 上 岩三郎
"	" 7 9 2	田	" "
"	" 7 9 3	宅 地	" "
"	" 7 9 4	畑	" "
"	" 7 9 5	宅 地	" "
"	" 7 9 6	"	" "
"	" 7 9 7	"	" 西 江 音 松
"	" 7 9 8	"	" 井 上 岩三郎
"	" 7 9 9	"	" "
"	" 8 0 0	"	東大阪市日下町 6 1 河 内 幸 夫
"	" 8 0 1	"	" "
日下町 2丁目	日下町 1 1 0 0	田	東大阪市日下町 井 上 正 治
"	" 1 1 0 1-2	畑	" 井 上 岩三郎
"	" 1 1 0 3	田	大阪市住吉区浜口町 4 4 2 田 中 章 蔵
"	" 1 1 0 4	田	東大阪市日下町 2 丁目 4 の 1 7 川 上 常次郎
"	" 1 1 0 5	畑	東大阪市日下町 2 丁目 6 の 3 山 本 巖
"	" 1 1 0 6	田	" "
"	" 1 1 0 7-1	田	" "
"	" 1 1 0 7-2		" "
"	" 1 1 0 8	畑	東大阪市日下町 2 丁目 中 辻 浅五郎
"	" 1 1 0 9-2	"	
"	" 1 1 1 0	"	
"	" 1 1 1 1	"	
"	" 1 1 1 2-1	"	東大阪市日下町 田 中 章 蔵
"	" 1 1 1 2-2	"	
"	" 1 1 1 3	"	大阪市東成区大今里町 1-2 島 谷 喬
"	" 1 1 1 4	"	" "
"	" 1 1 1 5	"	" "
"	" 1 1 1 6	"	" "
"	" 1 1 1 7	"	" "

町・丁目	地 番	地 目	土 地 所 有 者 住 所	
日下町2丁目	日下町 1118	畑	東大阪市日下町2-6-10	土 居 芳太郎
"	" 1119	"	大阪市阿倍野区 天王寺北の町2-98	奥 村 幸 一
"	" 1120	"	東大阪市日下町2-5-25	石 田 直次郎
"	" 1121	田	"	"
"	" 1122-1	"	"	"
"	" 1122-2	"	"	"
"	" 1123-1	"	大阪市東区道修町2-49	川 上 好 憲
"	" 1124	"	"	"
"	" 1125	宅 地	"	"
"	" 1126	"	東大阪市日下町1126	川 上 常次郎
"	" 1127-1	田	東大阪市日下町	井 上 岩三郎
"	" 1127-2	"	東大阪市日下町1121-1	南 英 男
"	" 1128-1	"	東大阪市日下町	井 上 岩三郎
"	" 1128-2	"	"	"
"	" 1129	"	"	"
"	" 1130-1	畑	"	西 川 能勢治郎
"	" 1130-2	田	"	"
"	" 1131	畑	"	"
"	" 1132-1	田	東大阪市日下町1086	西 川 武一郎
"	" 1132-2	"	"	"
"	" 1132-3	"	"	"
"	" 1132-4	"	"	"
"	" 1132-5	"	"	"
"	" 1133-1	"	東大阪市日下町1130-1	阪 口 信 治
"	" 1133-2	"	" 1057	阪 口 秀 信
"	" 1134-1	"	" 772	西 江 吟 二
"	" 1134-2	"	" 1093	土 居 稔
"	" 1134-3	宅 地	" 1133-1	阪 口 秀 信
"	" 1135	田	" "	"
"	" 1136	"	" 1100	土 居 芳太郎
"	" 1137	"	東大阪市上石切町1-3-41	寺 田 伴 嗣
"	" 1138	畑	東大阪市日下町	西 川 武一郎
"	" 1139	"	東大阪市日下町7-6-4	井 上 正 治

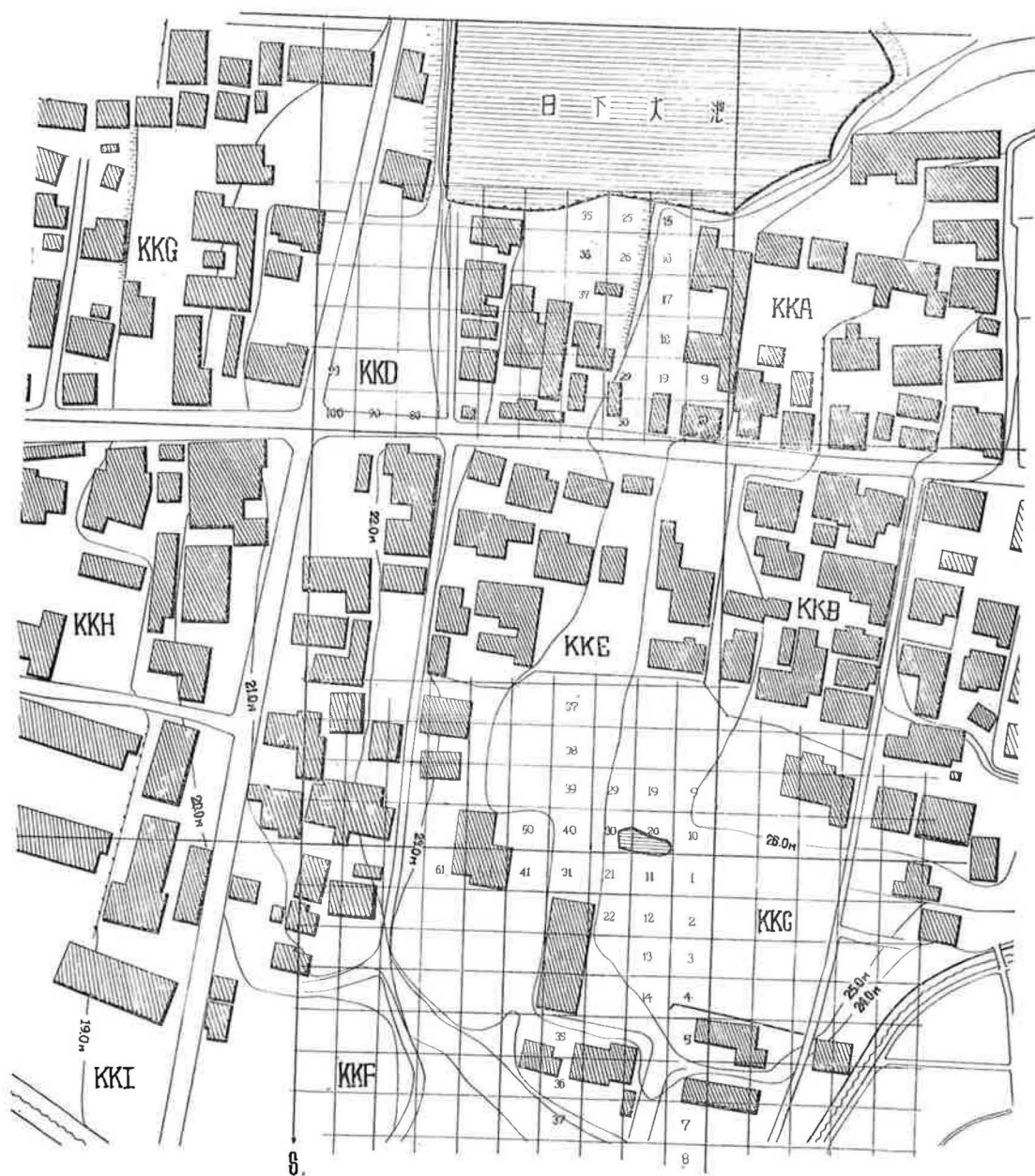
町・丁目	地 番	地 目	土 地 所 有 者 住 所
日下町2丁目	日下町1140-1	畑	東大阪市日下町 土 居 芳太郎
"	" 1140-2	宅 地	東大阪市日下町2-5-36 阪 上 清 一
"	" 1140-3	"	" 2-5-36 黒 川 清
"	" 1141	田	" 2-5-4 出 口 ヤスエ
"	" 1142	"	東大阪市日下町 阪 口 信 治
"	" 1143	"	
"	" 1144	"	
"	" 1145	畑	大 阪 府
"	" 1146-1	宅 地	東大阪市日下町3-4-16 山 本 二三夫
"	" 1147-1		大 阪 府
"	" 1148	田	
"	" 1149	"	
"	" 1150	"	東大阪市日下町817 土 井 与 一
"	" 1151	"	" "
"	" 1152-1		
"	" 1154	田	東大阪市日下町 土 居 芳太郎
"	" 1155-1	畑	" 河 澄 泰 蔵
"	" 1155-2	"	" 河 澄 正 直
"	" 1156-1	"	" 土 居 千代子
"	" 1156-2	宅 地	" 土 居 豊 一
"	" 1156-3	"	" 上 好 義 夫
"	" 1157-1	畑	" 井 上 岩三郎
"	" 1157-2	"	" "
"	" 1158	"	" 河 澄 泰 蔵
"	" 1160	"	" 寺 田 三五平
"	" 1161	"	" 井 上 岩三郎

図版 1. 周辺の遺跡

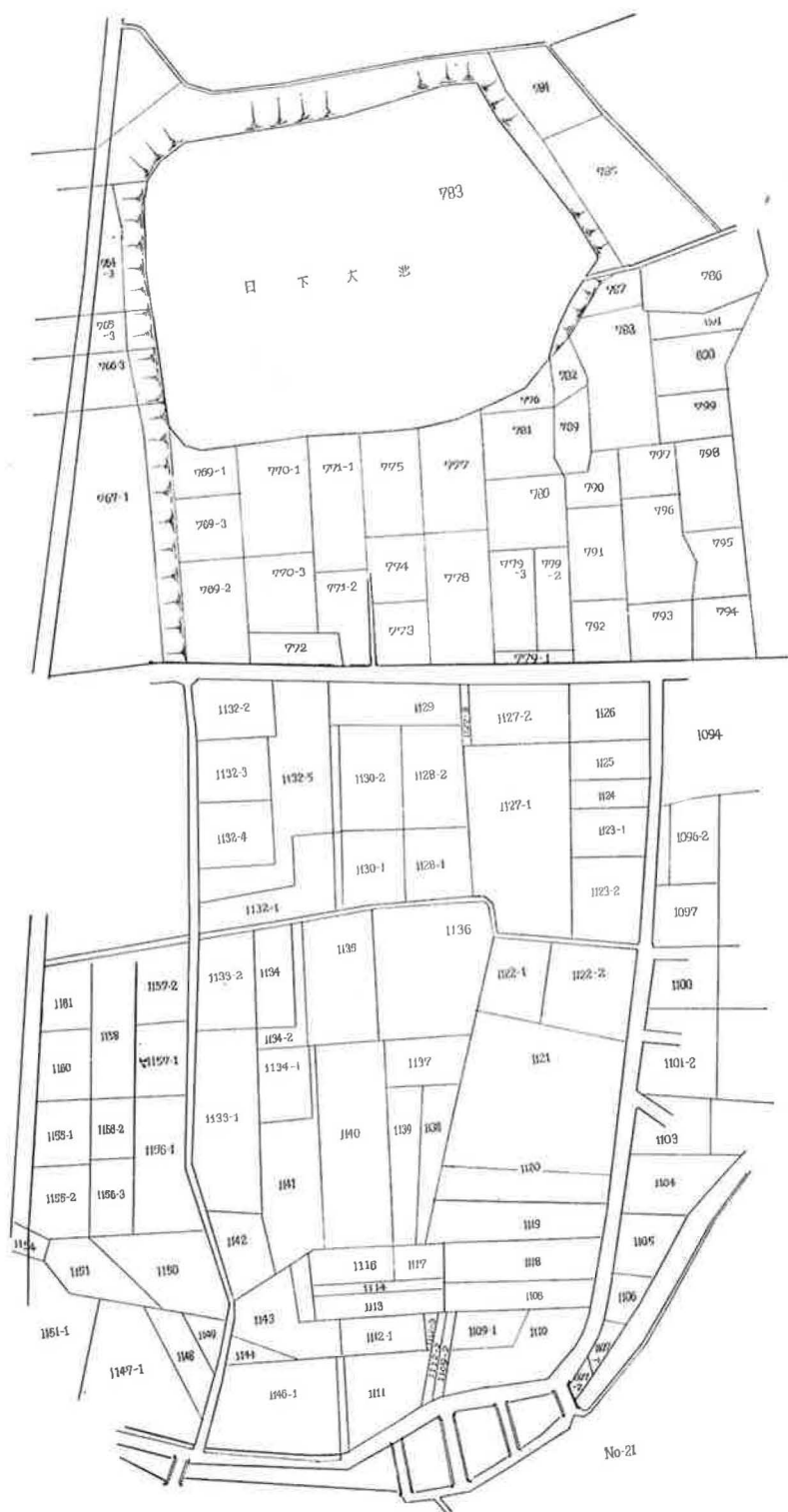


- | | | |
|---------------|----------------|--------------|
| 6 稻成山遺跡(古墳) | 14 馬場遺跡(古墳) | 23 芝カ丘遺跡(弥奈) |
| 7 池端遺跡(縄文・古墳) | 15 石凝寺跡(奈良) | 24 石切中学校校庭遺跡 |
| 10 東尾古墳 | 19 千手寺山遺跡(奈良) | 25 和泉遺跡(弥生) |
| 11 日下神社古墳 | 20 芝山古墳 | 35 辻子谷遺跡(奈良) |
| 12 正法寺山遺跡(奈良) | 21 芝坊主山遺跡(先土器) | |
| 13 日下貝塚 | 22 芝遺跡(弥生) | |

図版 2 附近の地形と遺跡分割図 (小区画は一辺 10 m)

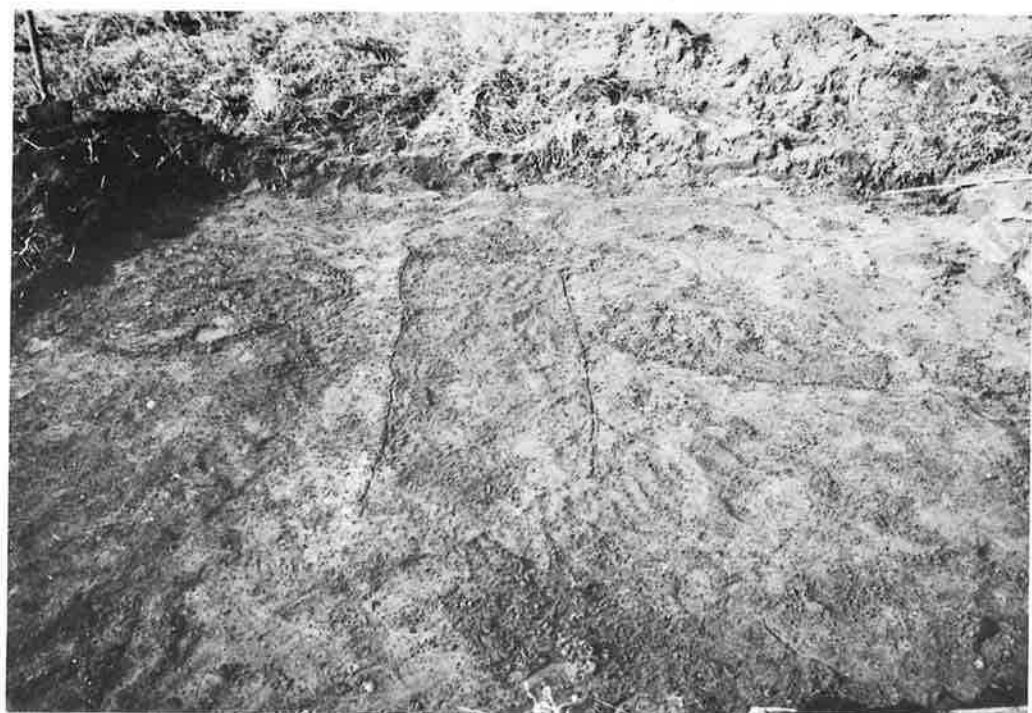


図版 3 日下貝塚附近地籍図



図版 4. 日下貝塚の現状





図版 5.

K K F 地区の遺構出土状態と調査風景



